KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

ホ 2
4723
1

門 亦2
號 4723
卷 1

譯文童喻序

譯之為言。易也。謂以彼易此。以雅易俗。是已。夫和漢雅俗。情理本一。苟能知其言意之所在。而迴之以其文。則可以撫殊域於衽席。化下蔡而為大雅矣。蓋為之不難。得法之為難。在昔吾王朝之盛也。國文之可觀者。多出

乎形管氏手其他撰集所載縉紳博士家之文珠聯綺合玉鳴金舂焞〻乎鈞〻乎列于藝圃者亦不壹而足也蓋古〻於和歌暨國文雖互有短長而靡單攻一技者猶異邦人之於詩與文然及至輓近間有以和歌命家者而至於國文則蔑如也其或援筆攄思者不知辭有古今焉裁〻有法焉法有奇正焉一如夫異邦之文遡源於經史百家觀瀾於歷代諸作者步趨操縱未少踰矩矱焉則其言玉石駁雜鄭雅錯陳萎苶骫骳雖多奚以為也然流風所染將就苟且廢而不講既非一日要〻氣運隆替所

係豈細小哉。伴蒿蹊子。於是恠然太息者久矣。嚮抽其腹笥。著述一書。將欲以針砭膏肓。其辭古今體制。明修辭楷式。剡劌精核。推始究變。大抵其書以類論撰者。約有五條。而譯文其一也。以諳初學進步之法。莫善於譯文。得法之捷徑。亦莫過於譯文。但其說簡而未備。蒙求猶塞。乃就其條。重製童喻者。推而廣之。凡和漢雅俚陶鑄點化之法。諄諄曲諭。不遺餘工。學者倘參之前書。更互温繹。則稍稍得其所入。久之必有心領神會。不勝舞蹈者矣。又安憂不正始之音。興于今代乎。嘉惠後學之功。何其至歟。嗚乎。

國文之不振也職由其倡首昔陳
涉鉏耰棘矜以開炎祚之端葛蹊子
乎其為斯道之陳涉也歟其自期許
乃爾識者亦莫不首肯之書成屬序
余〻也於斯學貿〻焉一無所解盲
瞽論色聾聵評音有不些笑者耶特
以與葛蹊子本同索梓道義甚稔誼
不容以辭遂詮次曾所畧聞于葛蹊
子者以為之序
寛政五年癸丑夏五六如杜多慈周
操觚於峨阜無着菴

三學紀止書

[illegible]

おほうの世をなりむ人をこゝろ[illegible]
つらゝにあまゝふ原よりさゝほみもふみ
てふゝのいとへうりゝ海ゝもむてゆにを春
乃ゆ不ゝ枝の露はけらるゝ心ゝをつゝうちむ
るにをゝよへ乃松の葉さもりはれ葉のもゝに
きゝゝ鶯あもをてなゝ九はるふめるゝれうあゝわ
松ゆやを和ゝ志ゝゝをゝ志ゝ、にいひ
かゝはゝゝ舞云の系武を雨はゝおゝる淺
むゝゝゝよ乃のしなゝ要ゝゆひつゝゆゝ海あゝ
いあゝたおもなゝゝ乃ゝいゝおゝれゝゝゝろ

けへなるを涙ちるわれあるかをうさまれ
きいつれみならめやを其かるハるもけうを
さうゆをを言ゆうしるかるを角つをつうみを乃
ゆるをけへ者いとよもす　けれもおをきくの
さうをかるりにうを世さをすうれハ
あ新みしうを義伊美しかるを我まあうを我
しうををよしを字理なるくしうら伊いをうを
伊をめうり明さを世をこいめ新あををらかめ
なうふへうをかを一討をしをようをうやり京
無形をうう弄箱を和かしうみうをけうく

流してうを人なるへうし世すうを人伊をなをあ
美不うをふをを寛政をまを年のを伊ををみ
あけしを山乃不をを京なるるやりにてかいを流を
新を友墻おを新をを子南学

院扶成

譯文章のはしとし

岡田子蕎溪著

門人　源詮校

或人こゝらくぢきに学べよ法をおしへる。譯文章
文章をたゝりうれうにしたがへ。なほ事
をとゝのへ。滝沢をとうつもしるこゝろふて。先傳をと
雅言にとりたんぱ。ちうてれ用たり。こゝまきう
まりしぞく漢語も傳書もぞくばをとうつもとめろ
ふていぞもとまのくぐり。ゆりひとぐさかるべし。近ぢも

古人のかくいひとうつして。おもしろけるすのことく
なり。宮商はなれ趣をも。詠ぜられんやは。其のまゝ
に儀律をうつさぬ漢詩とうつさぬ事し用ふるべし。
唯篇をなさぬまでは古人の力にありていふとも
すゞろなれど。其歌の上手ときこゆるものは
昔今たゞまことあり。国文のうへにおきては。とすぐ
きものとも。かくをなすべきものとも。其様を撰ぶる
ものなり。又のみちはたゞ。これをとられるよしう。
いましのよろしきに。其すゑとつゞるにいたらん。

これ古き詩なり。本達の沙汰しのことなれども。よし
其散らしよろこぶ人のかんなへ。其のが揚なそを其もれ。
化の韻をも去りしかども。其韻をきくの人。其のが
あしきをも正しくて年たつれども。やがてしか道のひろまる
なはべしと。詩は約り。青陳なりしよりこの繍継
まで歟よせくるとの国に其ありしは。漢の代
四百年のはじめ其じて。国文の道より
おもて。其のれ陳後より習へば。後かまるれ
高祖なる人ぞうれしと其まつり。

華實乃辨

凡そ草木の花実あり。人の志わざはこれにたとへ。言葉の華なり。言乃うへにてこそ。華
の華なれ。又の実なれ。花は（先ニ著ス世々ノ跡ヲサス）歌をもて。
言とよめるわざの。詞はことにこそ。やはり
た。華なりそこ。あまりに辨をとこそ
てんの花ざうなれ。人の世に。秀句
をつけるとこそ。はじめて。祖とは。おて。伝来
さるれぬるものふたぐ。実なりとこそ。又乃

俗言雅言乃差異

俗言なるべでうどのぬるれいつけ。塩のたぐ
乃。券書をそなうちぞ。辛乃ちくいちて
あづうるべ置めく。のちごとふるべ。雅言と
やわざるめく。扱次よ雅言と俗言をは。

皇國ふまれる人。ぬばたれ詞をもつづる。
清水づりうえ。わづ。今の雅俗ぶり
めあり。其雅言へ。の詞ふり。俗言は今
いひなれ。ふ詞。見ぬまれ。けうう。

まつりごとをもてるまつりごとは。わかのかといえり。
うぢとは老媼ものふるがきを。乳母をとこをうぢ
ふとぞ。たとへていへるなり。序田舎ことばの
て雅言のきこゆるし。さてはうつくしくふる
けるがなりぞ。われが國ぶりのうるはしくたんとをだ。
うるわ雅言を俗言ふうつし。歌の俗言を雅
言ふうつしなどもてあそぶべし。さてゆゑ
は雅樂も質よりだうぐちけとぞ。
いろいろと唱へ。如之とうちるぞ。いづれにいうえし。

其体ふるきぞ。又をとこをとこいつるは。
をとこをとこ。ものをとこをとこ。
わりこころえぞ。けは雅俗のふるい質言乃
わいをとをとんをもつぐ。古言をもつ。
古事記。日本紀。萬葉。祝詞。ふるいうれ
ぐもし。さいの初なるもいうえがさなるなれど。
きりちりきりつ入れて。古今集乃序。
三代ふの詞。古。伊勢ものがたり。古伝日記
のたぐひをとにに服をつけてゆづものづ
に古朋あんぴつ。ふるれうふ。ふたおに挙げる

おもひ出ぬ源氏ぬしをそこなはぬ程の紙花乃美紙
つぶてにもれをそえてかぶとの時代の相乃上にわうを。
一筋の浦もくらるべし。是をふらつる。中古より
へふるまれらしぬ。ぶじを古中古乃文ぶりあまさ
さし。そのうへ手をたさこころろこざれぶらーなし。
今風ぶりのうたうくんの斷きぶりよりまも。
おふ須をも。寄枠ふしんと半いざれぶるべし。
はれぶこをとろこ。これをたのむいうとおり。
雅文を俗文ふうつを條

雅文を俗文ふうつをいはるこれ。たぶ文章
書ふうれをふもあるべ。おろくをとくこころえ
たうもよ。くはーとやくひーうべ。新人源氏
はきぶふ言のうちぞこうしてもて
ありてぶいうふとはぶ。俗ふ雅ふ俗ふ雅ふ
ひうと書ぶうを。

原文 みほうこの学は作者てそるうわぞるれた。
わづかはうちるむべきとえくまんふ多こうは
中ふをぞふんみうひさざむまでやりそるぞを

のこりなほやけよけうまつりけうぐゝた
まへうとなるべきぶとまつらのとなる
べきとり出さんとあるべしうぐさん
ぜかゝしきもひとりやりぜ世中とま
つりごとをよなゝびたはたれけ
らをぢいらふるびをてぐひろふふゆづ
ふうんぜぐまと家ろちのあうじとをぐさま
くひとりをおもひうぐはたらいであし
うるべきと大事ぞなんうぐふみほうる。

とあれどうをぢなるうをぢなのめて
けをもあるめびきくんのちくろふとすたべし
きつれをそびをてくんろをさるをとあまさえ
あゝ見えのぬくなゝぢゝにみひをぐむ
べまぢゝぶとをぐうりふ何ぐゝ我力ろ井
かゝほしびきはくろふるふくんをうふ人
やうもやぢゝをりをあるくんぢゝのまぐさ
きふるべゝぢゝもしまぐおりたうふ
くみぐつきぐりとぢゝおりひ

とゐる人がのまちかねさしさき、
たゝ〳〵あるかぎりのもの〳〵おてらるゝぞれ
ぞ学のまうをぞとて人のもるまに学り
おのよぐそいとゆしきこゝかも。以上見と俗
人にせるゝ。
せるの人まてこれぞ雑うさも。ちかあゝ定
めさ。家の用のことをぞちまつせてみること
えゝまんうん。多ふ中ことも定めぐこきく。男
乃朔延ふ仕人者しうこも。開白大臣うぞて。

御政勢をあづりおふ主の義をあうぐを。
とりおきんりの婦をるべし。去ぐゝ貴者ふ
てし。一人二人まで。学中ふ法うまぐよの
にゝぐれぞ。百度のとの船のとき。事ふ彦ふ
ふあづりたぐ。徒きあの用乃ぐうぐ
すべき人紀りを歩だうに。ぐうでうふ
うゝ大事ぐ。ゝこれふおれ。ゝゝと
おりへぐ。こまく。大りゝにゝるあたれぐ
の人乃すなゝとぬをゝたんふまゝく

乃ありけるを。多くの見客をべし。そもそもの
けうこそ。一向無ものとなんなれに。みるべくは。
とうけうの数つくらんよりはべりふかくの人なれ。
と。そもそもべきめるくの。意をかくたるべし。
必我をうけるふくもの。
おぼべくこそて。深そぐるくへいまつもとそえ。
そもそもまもとき。おれべくそ。おしはの
らくこそ。はべくも。そもうをあくんふまとふ
りそべくあるふんくたくもなし。はと

行をうつもも叶例さ。又稲荷社日供再興記
しいまのい荷田春満の有。を井将清寺ふ代りて
書まるるり。今こに筆を。侍ふほとくへき意
を言しむ。しかし侍なることを雅よりのべられるハ。
筆者たるもの。ゆ春の文いさたも出べり
なるを。ゆ山ものりてしはれべ。筆叶附録のお
とえを。ゆ山ものり。

原文 稲荷社日供再興記

朝ニカケテ申モ恐レアリト云ヒ言也

荷ノコトク△▲ヲ以テ上ノ句背ノ印ヽヽ
○●ヲ以テ下ノ句背ノ印トス初字ノ三安キタメ也

うけまくもかしこきいなりの社のみたまを寄り

たまへ。おほんうつくしみ。神風の伊勢のうちとの
（恩）（○發語也）（内）（外）

おほん神ともをはじめてたまへれば。人をたまはりけります
（▲）

ぬさいやまし。宮にいやまれたつたとひろせのおほ
（●發語也）（上ニ内外ト云ハコヽニ龍田廣瀬両社ヲ）

ほん神ともひとしくおもくしめへ。たなつもの。
（出ス細カナルモノナリ下モ此例ニテ心ヲ付ヘシ）（田ニ生ル物）

はたつもの。ひこくさいつるまで。こふみのおれん
（畑ニ生ルモノ食物ナリ）（衣類也）

神のふきみめぐみに。なしとげをするをは。しるれ
（成就ヲ云）（科長）

どの神のいのりも。かぜまつりのしるしなり
（戸邊ノ神ハ風ノ神也コヽハ只風ノ事ニ用ユ風ヲ鎮ルノ祈也）（晴ヲノ祈ル）

あめのもしひとたりたまひしをおもひけし
（雨ヲ祈ル）

たまひたるぞされはこれとよあしはらのみづほのくに
（皇國ノ惣名也日本紀ニ出）（瑞）（穂）

なりいづるくさぐさのものをいやしきもいふもさらなり
（生）（出ル）

おもじされおほん神のみたまのふゆかゝりて。
（恩頼ノ字ヲ日本紀ニヨメリ御恩ノ事也）

△饑 うゑをまぬかれ。いくへかくこゞえをしのびし
（▲寒コゞエト同シ事也井トツカフハ音便也）

いふまでもなし。よりていつゝのうちつくにのくさぐさ。
（旦雅ナリ）（△五）（幾）（内）（道）

○みつのみねの神風をよろこびき。なゝつのみちのみたみくに
（三峯イナリノ峯也モトハ此峯ニ御社アリ今モ舊地アリ）（▲七）

も。みもろの杉のしるしをいのるあまた。いまもふは
（●御社也杉ハイナリノ神木也）

二月 きさらぎのはつうまはまうでのみちあしくとも
（詣ト云ヨリ道ト云モ縁ノ詞）

なんありける。ちくのこなしとも。さまし月八日の世のさま
（ニカヽル）（ツレノミナラズノ雅言）

ぐさに。鞴まつりとなんいへなる。冬のまつりくらべり
（フイゴ）（下甲タルナリ）

たるやうなれども。ものうらくの鍛治うれだくみりぬ。遠近ノ人々ヒニ也
ゆうたたくぬ。おもてをこのみ瑞籬ちにくこびぬ。そろぎし
とふのうばだにぬぐ。ぬぐ。たぬ。されうし。あさためし。佳例
ぬたたたもあるふぞけぐる。まそそのめく。往古
禁廷月次新嘗皆朝廷ノ御祭ナリ新嘗ハツヨミニイナメトヨム紀ニハ
おいやけ月ふる。にいなのまつりぬ。ぬたまそ
ニヤトヨミリ月次ハ六月十二月ニアリ新嘗十一月也サウ兄ハツヨミニテトヒヌリノ祈年祭ニモ朝廷ノ御ヨ也
げるぬふるれまて。やしぬのあはんはうひ
ぬちしそそもひうれのまつりれいみじちあどい。
いまそそ海ひびいぬ出盡ぬべくしちぬぬ。ぬべて
ひそそ事すちぬぬぐれ社ぬぎのたりそ海ぬ。まの

花ぬいろいろもるうしぐ。おきの月ぬひとりも
きそぐしくぐぬりそる。ぬうそたぬ。ぬうそ無に
れぬぬ。海四爭乱應仁記ニ三エタリ
郵もるぬりも。ぬそぬ。ぬふれそやそうちぬそちま
ちぬぬ。ぬたけの公家諸國ノ諸侯ヲタノミテ下ヒヒヌ
ひらそやぬる神官モ同ジクニヲハシリタリ
ぬぬのまつりそもぬちまぬにそとぬそ。
ぬそれ社ぬぎぬぬそぐぬひし
ぬうそそそぬぬぬ。ぬうにぬそれそのぬ
ぬそそぬぬ。ぬぬたいくけぬぬぬ。ぬぬ

崇 神 離也 内 外

神樂歌ニ本末アリ　神樂歌ノ名　同上　止タルナリ

怪異　雄誥　嘖讓　以上ヨ本紀　軍兵トモトキノコヱナドアルニヨイフ

ノロシト云　兵ノ用心ニタクノ舞也　モトハ神々レカリレ庭燎モ御燈モキ、ニルナリ　狼　烽火ノ名ニ

無道ナリ　炎　延燒ノ云

壯麗　瑞　御殿

樓　臺　神庫　文殿

百　神寶

千々　神事

神官社司等

毎月　毎日　御膳バカリハ

拵シ也　代々ノ勅書ナリ　発語

百不足ハ八十氏ヲ云モノ、フノ八十氏人トイヘハ是ハ武家ノ己ノ寄附

狀ヨリサス

△たてまつりてきくしもの。そこらさられ日の
御膳料ノ田地ナリ　ミケハ御食也下同シ　鑑トスベキ證文アリ　其邊此邊ヲイフ　日供ノ
くまでしろ田ぐそくまでしぐれてし。
一町　一チ　片代ナリ　一代ハ一段也ト古人ノ説コヽハ半段也カタシロボドノ田トツヾケテ手カトウケタリ
ひゝ田かさしろほどのぐらうもあるげれども
しく天正のころ
御饌　奉ラスナリ
ざるこゝろなりぶぐる。やりがいのうれしこれよ
憂
きゝうこゝろあるず。ちゝ
サウアル故也　△先祖ヨリノ
よりこのこゝなのこゝろ
子々孫々也
ゝもぶいうでうこれ
恐　果　カクアル二也
いるぶ。ハ
海外ヲ云前二四海トイ（九二應ズノドカニ沿ル也
食國
ぶ

にぎはひをかなふ。あしさんにころげをとらげまし
きのふ。そろころぞしともるかなべし。そのたちかへる
きむべしといつもぞめでたきとぞきこえ
ば。ましらひなころにさだめよしわびひさ
かなこめさ。このみなづきの月十日あまり六日とぞ。（発語）
まをし侍りしかば。ゑひしげやなびむ
うれたうそ。えゆきの日ごとのけふのそつけと。た（発語）（日供）（初日供）
かすまつりけんつかる。それとそれがいとぐく。きさ
しるとなくぞしきとれ。たえるをはぐつゝれ（列ニ入ナリ）

いりしぶ。おのしそのけふ。さけきろもみをしまゐらんと。（御食代ニ金錢ヲ捧ル也）
おりわざるかさとよりしぶ。おはつぼ。さりしくあれば。えこれを（来集也）（前ノコヲクリカヘシ）
いなりつぶちかつぐく。さるともなくきしげるとなく。（イフガ甚親切ニテカヘリテ筆ノチカラミユ大カタノ人ハエカヽシクダヾシクミユハナリ）
すきとたるをおくれうぞふくそまでたすかるとも
それはのみちかるものけふぎんと。けふつげるところ
よりも。まうでくるひとあまたのかずもこそ（参詣）
いとしけれど。かぎりなくよろこびにそち。
けふりまきのしひきころにあまりめでたくてこそ（毎年〳〵ノコト）
うけしろ。いやますいやましゆくすゑ。ねがひも（弥益）

顔モミジルト秀句ニカヽリ水ノタエセスト又秀句ヲ重又
シテト云詞ヲ以テノ緒手巻トウケテ クリカヘノ発語トス　往古

ちはやぶる　ちはやぶるのいはんうぶり。
たをまつんはのこゝろ　寄君世
のり。うつゝをもしらぬ　寄附也
以下ハ祝詞ノ辞也
はらへたまへきよめたまへ　まるくしと。
祈ノ古言
めくまきはんぐうぶ　△古今集ノ序ノ詞ヲトル
▲同上
ぞ。ぞりのおとひさしくぞ　ね
ぞ。ぞはのぐぐたぐ　けし
ろたそまつまるくんぞ　ぞのぞふそのぞ

ぞ。ぞ氏ぞのろをぞ　日供　再興記
ぞ。ぞはのぐぐけ　ぐぐ
ぞ。ぞ　如此ニ同ノ

正徳二年壬辰九月

花の伝ふも譲るべきを既よ侍況まぐ
なれば　ぐぐ
ぐぐ。凡なる非ぬ　ぐぐ
ぐぐ　ぐぐ
ぐぐ　ぐぐ
ぐぐ　ぐぐ

体しべしといふまり。門弟自文雅をふも此意と
こゝろえ。河乃文を伝るこれの古の詞の
まるべし。然まで唯古にしたがへと申ばかり。
其時代をわきまへざれば。祝詞の言にものぐるれて
そしりなどもさぶらひそぐらしめん。それいかに
にて雅をわきまへ。其詞のまりなのごるをも。
教を半てわつぶし。其上のようあいをく人の
本とも。さまざまの名みにあるべし。先事の紀をよく
書ひらげれば。其歌詞文章とのや。本末をあ

ぬまふなり。伝文を雅文ふ深をえん
合をべし。

俗文を雅文ふ深を深

何ともを澤さんとも申ひをれる所しもよる
人情事さ。道の紀乃あがりに申ものでいつく。
近世事ふ名おるく人くれ乃申ばりなるに。
文章は俗伝をふそ。そくの事ふあるじ
やとぶうる申ふり。申よれを辛ばり雅をう
さ。文章れ伝てなるい。詩歌をえを伝な

[illegible]ることもたやすいことなれば。
そこにて。幸にんかたをもてなされぐるんさるたちたち
まれ来つれば。ち伝日記いさんぐ[illegible]れの日記い
ざよりの日記などをもみさまほで。けらまれ
日記などに。其学もやうちりられがちのえをうん
と用ふるものにそわど。学のぼうに徒れ[illegible]び
たるべく。東園紀り。（保親卿の伝記。先を勝出用の紀と
向の事を系譜をもて伝す。叶紀の始は仁治三年八月十日より。貴
か向い建暦元年にて。仁治三年に[illegible]。[illegible]
ちわで枝葉拾集りに保親卿とあり。）
いげ。[illegible]れいまれがちに近体

[illegible]れど。伝[illegible]べ。乃ぐし今の伝えの基と
いつるしや。されば働んもまき人のなくなるべし。
などかくしてそるはいで。学ひとりてをりにを
[illegible]る。木雪伝乃紀[illegible]の中二部。[illegible]
し深し。絵ひ先い貝。京春。猿蓑[illegible]ふ役
んことを打ひて。[illegible]れ[illegible]
[illegible]れど。今い雅文乃[illegible]
[illegible]ふ[illegible]。
乃志とぐふいつべ。元幸わ[illegible]

にたりてれ炭焼するものなり。

木曽路の記乃図（ほる藪のあ

原文 ほるれ藪いかきうゑ木をうゑ

ばなるよりもあるくいそぎ。藁の

焼るまきのうるおくまきこと

くもりがちし。此山はまりとふ名なり

ぎば。一日乃内ちぎし。焼なきはまた大やけ

まる時ハ又里七里のるみひしくるゝ郷

ア。四系統の記也。ひぐきと解ることなり。

焼石乃ごとくなる石道乃

傍ふ多し。常れ石なりも悪し。大焼ハ稀なり。

小焼ハ時々あり。江戸のあるりへ。此山大焼れ

ハ。時々江乃毒なることなりといへ山ハ江戸の

かたへちく。美濃尾張乃ものとハ世ぐるり

に。業平れ乃ものの記ア。伊勢尾張乃ものより

ほりうゞ藤とうんア。寺とをるやうなわど

も。伊勢尾張の方ハ山ほりとこ

ろば。ほうゞ藤ハいとくなる。業平乃武藏

上野乃国にて。清らるゞ山とゝあるうゝと。
仲秋物ごゝろうつくしくぞ。
右道乃ちるゞうわらけもて。伝なきあるとも
ゆゝ。ねがうゝのいばらるゝ。めくやうに
書くる中へ。自己乃ちゝ。入ゝゝを。
ゆゝ。似たゞしかゞで。あんさわがもとうさんに。
△清河乃ぶけいとくゝを。わどゝゝ。井のだ
うゝにのびりゝとゝ。けるの水泡乃ぶ
うくゞりいそゞ。常世乃ちゝのゞ。

飯炊
いゝうくゝをゝるゞゞと。仏ゝり。
半
ゝりゝゝにい。木象井ひざるゝうゞり。けゞ
しゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ。
陶器
淘すなど。清ゞ。碑けゞ。焼るゝ。ゝゝ。
いゝるゞ。ゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝ。
ゝゝり。ゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝ。
山。ゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝ。
ゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝ。
いゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝ。

もきしうみづけ乃ひるまこと。よみおろし
くん寺とゝのゝ。ゆがりしくぱきたにたるふるや
ゆうん。以上是いくさぐくれたびめしたきやうれ
ど。くつの付乃くさびだぶ未れ。ぬ。さるゆう
るなり。又ゆまりふこるゆうなることは孫ざれば。
ゆしくなるぐしぱわが是とさしけんさゆぱ
未て。ぱ松ねざめ乃ゝ康の孫とゝうて。
原文 上巻の民家八十半。ぱ且乃京。ゝたちぐ
まるり。所ゆりすしゆゆ。諏訪大明神乃

乃居ゆり。夫より先に神にねざめの系原ありゝこれ
系原ゆまで。十四ゝ所ありゝ。ゆ是ゆ通し。系原
より勝二所ほど西へ行ゝ。臨川寺といふ禅寺
乃ゝ。そゝゝ乃浦岩ぐ絵ゆ。森見乃康ゝ。
寺ゆりゆる岩ゝゝとたゝて。ねざめ乃康ゝ
ぐるゝちゝゝゝ。孫見の康ハ。
本岩門乃ゆゝふゆり。井ぱゆゆる岩ゝゝ。岩の
横十間。長四十間半ゆ。ゝゝゝゝ乃ゝ。弁才
天乃ゆゆゆ社ゆり。ゝ一段ひゆゝ石乃ゝ。平

なるか。そのさきにわざわざ庫大岩あり乃
ごとくなるもの。業作といふべきなり。そこに年
へ。糸乃方へ行くのごとくにして。大石あり。水ふし。
西へ木雪川なる。孫岩あり。庫の大岩。西へうと
木雪川にのぞむ。そこに石屏風をたてるごとし。
むかひ年大岩あり。西岩あり。水の幅二間或
いこゝろ。水ありて流のごとく。そゝぎり流る。大河
かくのごとくせどくせどくはゆ。ふうきとなり
ごとし。其西岩の世ぞきかは。大十間ばかり

高さ三丈。その高さ乃岩なり。そこに石屏風
にまれ板石なり。一のつゝ乃ちり。川むかひの大岩
のつゝふ。これ完あり。一乃大ぶりと大谷といへ。
二乃ふふと小谷とも。皆そこにたむろり。むかふ屏風
岩とも。屏風をたてるごとくなる岩あり。西の
大岩のしもの付にそこみ岩とあるごとく
岩あり。又西ぶ岩とぶにたる岩あり
そこぶ川のおれるに年岩あり。年岩ふ西岩
あり。そこに西岩と素岩とあり。素山あり。

こゝにあり。檜椹櫧槇など。こゝばかりにあるけし。
杉もまた。此地ハ。他所のすぐれたる風京にまさりて。
奇妙なる風京なり。いつくしう潔(いさぎよ)く。人あり
をしげなしとさへなしのくさし。浦嶋がまし。日
本紀雄略帝ノ紀。并ニ枝葉略記にみえたり。
此地よりいさゝかはなれたれど。又むかし。木曽乃
わざめの庵は。三段の瀧といふものありて。先生
此業を人に伝へしことを。三段といへる。世俗
の謡にも作りて。又飛雲(ひうん)とい謡に。木曽乃

山中みち。三熊野の山ぶしあやしき者にあへると
つたへしことをいはれも。怪なる書にもみへざれば。二ふたつ
ながらへしも。わざめの業をしるしおかければ。ふたつ川の
橋とし。大きなる橋あり。たゞ小野の瀧ありて。人ごと
たる瀧なり。細川玄旨の老の木曽越といふ紀
行にも。木曽路乃小野の瀧とは。布引箕面
なども。おもしろし。わかりやすけなる。是を花乃為の此国
の奇観なれば。ふましたるやとうけてし。以上
これをとりつけは

△しまれら肉や百たらんやらん。汁口うりのな
がめ。こよひふよかし、うりてりきまやえもるこ。瀬おの大
がみの名居たまり。これにやまされはより。
見より入まてゆまかはわざわ水もとみま。深
川ちみさし穏に岩ばはまちとはしき乃
たとくぶるれば、おは本雪川のいとも棲な石なまわらぞ。
流れしとみぶきるそみさきもくるめくこともちん。深
さしはりせざし岩。むきたのみ所のけるをたとふ引あげ尋々しても寝岩乃
床をいとしさ大なる巖なかに川よのぎめり。ある

さるそまの所か小うたる社あり。○難ヤ天乃ヲ社々を探く小さし
岸なる石なけやぎし床をれぞり。猶巖もし西ま
ましぶ。岡のどしとみぞるるが。いくことはそうりしきつれぞ
行くれとし名付る。○石の名あれそきわどいへれど。さらふのつかやまれ。ぞやの尺とは男らぶしい又行ろ行丈ゆえたど
いうことはぶありえし。象ゆけ歩さうなど。古よこくぶありしくしし。うつひはありかりたり。引尺あり九帳。何ぞ人乃屏風などやうふて。言
されどこの大やうなるがうろん。さふいふくらんどころあり。ゆづいそ
むしふくゆもさびし。吹雪乃自のしるる。物わびし
きこちはれせ。見は万葉集乃寄。稲舟の行とのくだ下向かゆそよもとみてとあり。こへたち入く
草とえけ。まずくらへてさがまり。川のもろひとも。岸乃ふすりて。この寄

然るにおきさへまさりておもしろかりけり。さて
世の人はみなことにこそおやしうめでゝけり。
清らかなりけらし。人のなしなしたるも及ぶまじきなる。浦
嶋乃さまなど絹されたるにいでこれ移してみとれば古よ
りふところえぐ。又こゝろりの森径くしてくるひもちろ
葉ばかりもへしあど。世のうきよのふかみれど。見とろ
うきたるよりたてんとし。此かた花空のまゝかれ御のたぐひなし。これとても
てい大かる橋をなか門といへるは。小松の流れ。布引
兵庫もいさゝかにかりやかなるこゝちすれども見るにつけてみる。

此國乃歌枕はいふおうしくんと。京都清范の
ういたまへるもむべなりとおぼゆ。以上
○又ある人中むかしより。記録文章といふ一種
の。書くかたて書ところものなれど。流文乃さる分ふかき
など。係文といふもの。いとみじかきをしるものあれど。
うし織りたりとしてこゝろえるとしがしあるべきかれ
ばからかなく。

明月記の内　新古今集竟宴御催の條二ケ條

原文
廿六日　元久二年三月也。以下同。　別當消息云。新古今竟宴。

凝風情可豫叅由蒙儀此事如何竟宴
事先例不審哉竟宴事不存知延喜
古今天暦後撰管見之所及不見竟宴
事只所見日本紀竟宴計也於其事者
被稱日本紀人別各得其人詠歌一首歟
只如清書之儀今如叅者不被此歌體
歟極以不審者　見之得せるい
〈ぐうのびうえふ〉新古今竟宴
乃うえよくしらぬ〈ものなり〉

うたたねとうつる〈けさ〉といふ竟宴のさま
しもつぐなりけるうえにたち竟宴のこと之志
らぬ延喜の古今天暦の後撰の左しなど
みろくうぐいすけさとこそ日本紀
乃竟宴ぞりいやつえふそさるぬい紀のうち
れ人をを題しを。みのしりとりし。
今うけうぐるりぬ見たいうちやし。
又
原文　廿二日叅殿見の後京極殿（中略）見叅次竟宴之事昨
日奉迎不得其心之由申之仰云以長房被

御。上ノ御云ハ後京極殿。此被御ハ院ノ上書也。廿七日已前清書。并又假名序。其已前可進。又可献件日題。者申云。清書不可叶假令之間可書出歟。假名序又更難出来。題事。新古今。被終功之由可宜歟。不可有題歟。若被待清書等者暫可被延引。廿七日被遂行者此両事不可叶由申了。者此事。更不得心。殿下不令知給。誰人無申事乎。又人云。廿七日竟宴詠歌止了。只讀上巻々初歌了後。可有御遊。其伶人皆可召新兆。毎事

凡不得心。下略　是を深まるハ

△殿はまゐりそくまうさせしついで。竟宴のときのこうけたまはりける。ところえぬとかんまうしは。殿おほせられは。清書をみをおりありて。廿七日よりさきにいかでまゐらせよ。けさ後京極の序もこゝをされよまで廿日の題をしまへなど。出不出のよしいかゞあるべし。おのまゝにけらく。いくさかきなんとしもかなうらん。序そもいかにいでくべうもあらざり。何事をもうちのべて廿七日にのび。此日をのぞくべからんや。題のことは

仕事あれとも終也とて仕りて出させ給ひてたりすん。
新とさうけさせ給ひてよみ給ひ給ひなどの仕りおとゝ
まづ仕りたりさい仕候と申せ給ひぬ。ぬしもや。
さてわらは申さうん。又人のうるとゝいはれ竟高ひとゝい
うぐめさせ給ひて世を崇てれ物のもとゝとみあげさのちゝ
殺びあんそちうぐめ人ぬぐ仕なるくゝとめさ見んとゝまん。何
ぐしくゝこんぬぐくゝうめゝ仕りぬ。
まで。為仕ぐりみゝ古ゝりゝ世ぐゝ仕ぬ。
ぐうゝやゝ為仕ぐりみてゝうゝ仕ぬゝ。